

Title	金明容総長学術講演会「教会と政治」報告
Author(s)	五十嵐, 成見
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3 : 36-37
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=4959
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

金明容総長学術講演会「教会と政治」 報告

2013年12月18日（水）13:30～15:00まで、聖学院大学ヴェリタス館教授会室を会場にして、金明容総長学術講演会「教会と政治」が開催された。講演者である金明容氏は、プリンストン神学大学院客員教授、韓国組織神学会会長、韓国カールバルト学会会長等を歴任されている韓国の神学界のみならず世界の神学界を牽引されている重鎮であり、現在、韓国・ソウルの長老会神学大学総長であると共に、生命神学研究所所長の重役も担っておられる。プログラムは、開会祈祷を阿久戸光晴学長が担当し、講演、質疑応答と続いた。翻訳文及び当日の翻訳は、現在、長老会神学大学校准教授であり、日本キリスト教団派遣宣教師でもある洛雲海氏が担当された。以下は、講演（題「教会と政治」）の要約である。

今日における教会論は、神の国を中心とした教会論である。それは教会が本質的に、政治的課題を内包していることを意味する。

教会は政治的課題といかに向き合っていかなければならないだろうか。たとえばキリスト教民主党のような類いの組織を作り、キリスト教的理念を政治的領域において具現化させることが考えられよう。しかし、今日の多宗教的な状況において、これらの政党が宗教間の葛藤を深化させ、社会的危機をもたらす危険がある。他宗教もまた同様の政治的政党を作れば、その深化は一層深刻なものとなる。さらに、キリスト教的政党を作ったとしても、その組織が神の御意志を反映する党となるかは疑念が付される。政党というのは、本来的に権力志向的な構造を持っているものであり、イエス・キリストの精神である奉仕の精神と対立するからである。

では、教会が政治的立場に対して中立を保つことが最善であろうか。しかしそれは、教会を宗教的領域（霊・魂などの領域）のみに己が立場を狭めさせることになる。この傾向は、ギリシャ哲学

によるキリスト教の影響が考えられるが、この立場は旧約における神の法とは真っ向から対立するものである。イエスの教えられた「主の祈り」は、神の国と地上の国の義の連続性を求める祈りであり、それは国の統治者との葛藤を必然とする祈りでもあることをわれわれは覚えておかなければならない。

プロテスタント宗教改革は、一つの地域に多数の宗教（教派）が存在するような状況を出現させた。その状況下で、神政政治を脱却する政教分離の国家論が模索され始めた。さらに30年戦争の惨禍を経験したヨーロッパは、政教分離理論の必要性を痛切に感じ、この理論が受容されるに至った。特にアメリカの修正憲法が政教分離を明確にしたことは特筆に値する。重要なことは、このアメリカの政教分離の理論は、国家の世俗化のための理論ではなかったということである。それはむしろ、アメリカ内に存在する多様なキリスト教諸派を保護し、迫害を防止するための理論であった。ところが、月日が経つにつれ、政教分離理論は、世俗



講演者：金明容総長（上段左）、通訳：洛雲海助教授（上段右）

国家の出現を保証するという大きな問題を引き起こすことになっていき、この影響は現代に至っている。多くのキリスト者が教会から離れていったことは、世俗国家の出現と無関係ではない。

キリスト教民主党なるものを作ったり、教会の影響を国家の中に実現させようとするのは、キリスト教が、神政政治的な夢を抱いていることが含まれている。しかし、神政政治的なものが政治的現実の中で具現されていた時代は、一般的にいて肯定的に評価されてはいない。中世時代におけるカトリックしかり、カルヴァンのジュネーブ市での評価しかりである。

神政政治のもつ危険要素は5つあげられる。①神政政治は他宗教・他信仰を容認しないために、迫害の状況が生まれやすくなる。②偏見や無知が、文化を抑圧し、支配してしまう。③説得による政治ではなく、力による強要的政治になりやすい。④神政政治への批判の可能性を遮断してしまう。⑤神政政治を執行する側の罪悪が深く問われない傾向がある、である。

「教会と政治」において重要なことは、神の国は人間の側がつくるものではなく、神がつくられる、ということである。執権に目がくらむような政党や、キリスト教的価値観をもって、自らと自国の利益のために行動しようとする人々と神の国とはいかなる関係もない。それゆえに、神の国は神がつくられるゆえに、教会の祈りが絶対に重要なものとなる。K.バルトが指摘したところによれば、教会が国家に対してできる最大の奉仕は祈ることである。政治に対して無関心である教会は真の教会ではない。また、教会は、政治的領域において働いている悪魔を深く認識する能力がなくてはならない。祈る教会・神の言葉を告知する教会が、正しい政治を実現するために必要不可欠である。この教会の祈りや神の言葉を無視する国会は、すでに非常に危険な状態にある国家である。

教会は、神の国のために働く人を養育し、世に送り出す機関である。神の国のために働く者たち

は、神の御旨を教会において学ばなければならない。神の言葉への深い理解なくして、世の中で神の国のために働くことは不可能だからである。

神の国のために働くことは、神の国の諸類比を模索することが必要である。民主主義がその類比となり得よう。しかしそれは不完全であるので、弱点を克服させ、発展させていかなければならない。最近の研究としてのガバナンス (Governance) は、この弱点の克服の対案となる可能性がある。教会の政治的責任は、神の国の類比を探し求め、神の国の諸類比を作り出し、これを政治的領域において、下から、神の民主主義を具現させることである。神政政治は上から、であるが、教会の正しい道は下から始める。強要に基づくのではなく、対話と説得に基づく秩序形成である。粘り強い対話と説得の道を、国民に対し、言論界に対し、政党に対し、国家に対して求めていく。またその方法が、教会の誤りをも指摘するなら、教会は喜んでこれに応じなければならないのである。

講演後、阿久戸光晴学長によって質疑が行われた。特に、日本のキリスト教主義学校でこのテーマは如何に応用されるか、という質問に対し、金氏は、「礼拝」は教会固有の領域であり、この点で政治と深い関わりがあるだろうと述べられた。参加者71名。

(文責：五十嵐成見[いからし・なるみ] 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程2年)